

# 辿り着いた末路

エスカリボルグ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

暁美ほむらが繰り返した結果、鹿目まどかがまさかあんなことになるとは、まだ誰も知らなかった。

なお、見切り発車なため、作者の気分で続編が投稿されます。

この作品を短編から連載に切り替えました。2018年2月23日

# 目次

1 0 話	第 9 話	第 8 話	7 話	6 話	5 話	4 話	3 話	2 話	1 話
71	61	51	40	33	25	19	11	5	1



## 1話

くまどか視点く

ガバツ

「……………またあの夢」

最近、何故かは知らないが毎日同じ夢を見るようになった。

瓦礫が散乱している街の中で目の前で巨大な化け物と一人の少女が戦っていて、私は白い猫のような生物と契約しようとしている夢だ。

しかも、夢の内容事態はあまり変わらないが、毎回変化している部分が多少ある。

戦っている少女の隣に女の子が三人ほど増えていて、その中に友達のさやかちゃんがいったり、戦っている少女と一緒に私も戦っていたりするのだ。

これだけならそこまで問題は内容にも思えるが、夢を見るたびに自分の身体に違和感が芽生えて、それが日増しに強くなっていくことに気が付いた。

その違和感の正体は、多分だけど予測がついている。

それは『既知感』と『身体能力の上昇』だと思う。

夢を見るごとに、見たこともない筈のテレビのニュース、友達との会話、学校での授

業、家族と一緒に食べるご飯、総てに既知感を感じるようになった。

しかも、一見筋肉がついたようには見え重いものが持てないような私の腕は、今では車を片手で持つても軽く感じる。

毎日を通ぐす内に、未知が無くなって既知ばかりになり、何をやるにも力を入れなくても出来てしまい、総てが色褪せて見える様になった。

ピピピッ！ピピピッ！ピピピッ！

そんなことを考えていると、目覚まし時計が朝になった事を知らせる為の不快な音です。

「ハア……」

以前は出さなかった溜め息をついて、朝食を取るために家族がいるリビングに向かう。

そして何時ものように、無表情から感情のある顔に戻して、家族が私の感情を見抜けない様にしてから朝食を取りに行く。

現在、鹿目まどか中学一年生。

つまらない既知感だらけの日常が一年後に、自分の一生にも勝るほどの充実した一ヶ月を過ごすことになるのを、この時の私はまだ知らなかった。

「時が変わってほむら視点」

「嗚呼、嫌だ。こんな結末は認めない。認めてなるものか。彼女のいないこの時間などもう要らない。それが、それこそが私の唯一の意思だ」

そう言つて、抱えていた生き絶えた彼女の身体をゆつくりと下ろし、自分の腕についた盾を廻して時を戻す。

時間が戻る最中、今回駄目だった理由と、次に活かせる行動的を脳内でリストアップして、今度はどんな行動を取るのかを決めておく。

そして、時が戻り自分のいた入院用のベッドから抜け出して歩き始める。

途中ですれ違つた看護婦や患者が私の顔を見て驚いていたが、そんなことはどうでもいい。

彼女を救うためならば、己の感情など要らない。

そう決めて歩んで来たのは私なのだから。

他人に忌避されようと、一緒に戦つた戦友に殺されかけようとも、私情を挟まず全てを利用して、壊して、殺そうとも彼女を救う。

そうやって修羅の道を歩いて、その最果てに彼女との未来が在ることを信じてこれまでも、そしてこれからも歩き続ける。

見捨てていった友の為にも、止まることなど許されないのでから。

現在、 曉美ほむら中学二年生。

自分が救うと決めた少女が、あんなことになっているとは露ほども思っておらず、辿り着いた所が彼女との幸福な未来の筈がまさかの地獄だとは、この時の私はまだ知らなかった。



## 2話

くまどか視点く

中学二年生になってから何か月か過ぎた、さやかちゃんと仁美ちゃんとの帰り道。

今日も私は何処か<sup>始</sup>で<sup>め</sup>したような友達との会話をしながら帰っている。

「今更だけどまどかかって成績良いよねえ。やっぱり塾に通ったりしてるの?」

「ううん。そういうのはしてないけど1日最低2時間は必ず勉強してるよ」

「へえー。でもそれだけでテストは満点を総なめしてるんだから羨ましいな」

「そうですわ。それに何か習っているわけではないのに、音楽の授業でも一番お上手ですし、何だか自信を無くしますわ……」

「もしかして言わないだけで何か習い事をしてたりしないの?」

「そんなことないよ。ホントに何もやってないから」

「このおく。さつさと白状しろおく」

「きやあつ!?もう!さやかちゃん、いきなりくすぐらないでよ!」

そんな風に表は表情豊かな仮面を、そして仮面の裏はつまらない日常にうんざりした顔をしつと友達と歩き続けた。

そして、途中で仁美ちゃんとは習い事で別れ、さやかちゃんとは上条君が入院している病院に行くとの事で別れ、そうして私は一人帰路についた。

家族と夕食を食べ終え、寝間着を着てベッドに向かう。

そう言えば少しだけ話が変わるが、楽しみが無くつまらない日常を過ごす内に何時しか唯一の楽しみが出来た。

それは、誰にも言った事のない私だけが一年前から見る夢の事だ。

夢を見始めた最初の半年はあまり代わり映えがなかったが、半年経ったある日に見た夢は今までと大きく変わっていたのだ。

戦っていた少女の面子は変わらなかったが、戦闘場所が大きく変わっていた。

そこは、見たこともない黄金の大きな城でその城には誰も人影が見えないのに人の存在は確かにしている。

それどころか、城自体から数多の人の気配がしている場所だ。

私はそこで一人、城の中心にある玉座の様な椅子に脚を組んで片手で頬杖をつきながら座っていて、大きな化け物と対峙していたさやかちゃんも含めた四人の少女が座っている私に武器を向けて睨み付けている。

そんな、おかしな夢だがそれにも何時もと同じように既知感はある。

有るにはあるのだが、つまらなくはなく、寧ろ見ていてワクワクした。

……そうだ。私はそんな風に戦える相手を望んでいた。

確かに前の様な他人を想い、友を想い、家族を想うような心は有るにはあった。

だが、今ではそんなことより全力を出したくて堪らない。

何時も自分で押さえつけている、今も日増しに強くなつていく力を解放したくて堪らない。

だが、現実でやれば相手を傷つけてしまうから出来ない。

ならば、そんなことにはならない夢の中で全力を出そう。

そうして私は、今日も夢の中で私と対峙する少女達を蹂躪するのだった。

「朝か……」

カーテンの隙間から日差しが差し込み、暗い部屋を照らしていく、その日差しが眩しくて目が覚めた。

楽しい夢も終わり、つまらない1日が始まる。

そう考えるとため息が止まらない。

とはいえ学校を休む訳にもいかない為、仕方なく何時ものように仮面をかぶって顔の表情を作ってから登校したのだった。

くほむら視点く

まだまだ。またこの時間が来た。転校してきて最初の日が。

彼女にまた会えると思うと、笑うことを止めて動かそうと思わなかった顔も自然と笑顔になる。

「暁美さん。今日から新しい学校なので緊張してるかと思いますが、この学校の生徒は温厚な生徒が多いので安心してくださいね」

「分かりました。お心遣い痛み入ります」

「もし何かあれば何時でも先生は相談にのりますからね」

「はい。ありがとうございます。早乙女先生」

「よろしい！では行きましようか暁美さん」

「はい」

そう言ってクラスの担任になる先生に連れられて教室に向かう。そして職員室から歩いて教室の前に着くと先生が私に

「ここで先生が呼ぶまで待つていてください」

そうやって先生が先に教室に入っていく。

教室の壁はガラス張りなので中が丸見えで、そこから中を覗くと彼女がいた。

救おうとして手を伸ばしたが届かず、それでも諦めきれなかった彼女の姿。

まどかを見るとやはり何時もと同じように、先生が彼氏に振られて怒つていて話している内容について、美樹さやかと苦笑いしながら話している。

そんな変わらない姿を見て安心しようとして……何故か出来なかった。

変わらない筈のまどかの姿。だが彼女を見てみると、とてつもない違和感を感じる。

救うと決めた相手な筈なのに、ここで彼女を殺さなければいけない。さもなければ、取り返しのつかないことになるかと本能が訴えていた。

だが、そこで先生に呼ばれた私は何を馬鹿なと思ひ、そんな思考をすぐに捨て去った。

この時、時を戻しておけば良かったと永遠に後悔することになるのに。

「じゃ、暁美さん。入ってきて下さい」

そう言われて扉を開け、中に入る。

そして黒板の前に立つて挨拶をしようとして、まどかの様子がおかしい事に気が付いた。

まどかは驚いた様子で、目を見開いて私を見てきていた。

そして、次の瞬間頭を押さえて痛そうな素振りをし始める。

「先生！彼女が!!」

「曉美さん？いきなりどうしたの……って、鹿目さん!」

私を見ていて気付かなかった先生の視線をまどかに向けさせた後、先生は驚いた表情をして彼女に近づいてまどかの容態が悪そうに見えたため、先生が保健室に連れていく事になった。

こんな事は今までに起きなかつたせいで頭が上手く働かなかつたため、先生に支えられて保健室に向かうまどかを、私はただ見ることしか出来なかつた。

## 3 話

「まどか視点」

「……あれ？（ここ）はどこ？」

目が覚めると何故か見覚えのある暗い空間にいた。だが、見たこともない場所なのに  
見覚えがあるのは何時もの事なのだが……。

「私はここに来る前に何をしていったんだっけ？」

そう。ここに来る前に何をしていったのが全く思い出せない。

自分の名前、小さい頃のこと、家族構成、友達の名前等は覚えているが、今日が何日  
で、昨日は何をしていた、一昨日はこんなことをした、明日は何をするつもり。

そういう普段の事について、いくら考えても思い出せないのだ。

制服を着ていることから学校に行くつもりだった、または行ったであろうことは推測  
出来た。だが、そこまでしか分からない。

普通だと、そこで自分の記憶を整理して思い出そうとするのだろうか。

「かといって思い出せない事に対してずっと考えていても仕方ないし、まずはこの不思議な空間に終わりがあるのかを確認しようかな」

私はそう呟いてから、とりあえず前に向かって歩く事にした。

かれこれ一時間か二時間か、時計が無いから分からないがずっと歩き続けていると遠くにポツンと小さな明かりが見えてきた。

こんな空間だし、人がいればラツキー程度に考えてその場所に近づいて見ると、そこには何故か砂嵐が映し出されたブラウン管のテレビとリモコンが置いてあった。

「今時ブラウン管って珍しいなあ。最後に見たの小学生の時よりも前だっけ？」

そんな昔の記憶を思い出しながらテレビの前に座ってリモコンを手にとった。

そして、チャンネルを1から順に回す。何回か回すとずっと砂嵐だったのがいきなり映像を映し出した。

それは、周りが暗いが小さな明かりが散らばっている宇宙空間の様な場所で、三人の男の人がキレイな光を出しながら戦っている映像だった。

しかし、そんなきらびやかな映像だが、いくらボタンを押しても音が出なかった。

音がないのは少々不満だが、仕方なく我慢して見ることにした。

「うーん。やっぱり、この映像にも既知感はあるなあ。ただ、不思議とこの黄金の槍を持



つている人と二匹の白い蛇が後ろにいる人に何と言うか……こう……憧れ？いや、嫉妬かな？そんな感情が芽生えてくるなあ。全身が黒い人を見てもそうは感じないのに……何でだろう？」

そんな風をかしげながら見ていると、全身が黒い人は笑ってないが、他の二人は笑いながら戦っている事に気が付いた。

「そっか……。彼らは戦いを、闘争を心の底から楽しんでるんだ。だから、羨ましく感じるのかな？」

そんな楽しそうな戦闘もしばらく経つと、皆で一斉に攻撃しあつて黒い人以外は消えて、最後に残った黒い、いや、黒かった人が自分の首に巻いているマフラーを掴みながら嬉しそうに笑って消えていった。

その後は元の砂嵐に戻ってしまい、いくら他のチャンネルに替えても替わらなかつた。

「うん。さしずめ、白い蛇が後ろにいた人と黄金の槍を持っていた人がゲームでいうラスボスだとすると、黒かった人が主人公かな？黒かった人だけ、他の二人を親の仇を見るような目で見てたし……。内容としてはありきたり。だけど、舞台が素晴らしかったなあ。嗚呼、こんな舞台を作れたらいいのになあ」

そんなことを言いながら今の自分の感情について考える。

端的に言えば、今の私の感情は『飽きた』とか『つまらない』だ。

自分の力が強くなってきたせい、か一生懸命やらなくても出来てしまい達成感がない。その上、やること全てに既知感、つまり既に体験した様な感覚がする。既知感の方はどうすれば満たせるか分からないからとりあえず置いておくとして、全力を出したいという願いは？

こんな感情を満たすことは、このまま普通に生きていたら永遠にないだろう。だがもしもの話だ。もし自分で場を整えることができれば満たせるのでは？

……ダメだ。そんなことをして万が一、周りを巻き込んでしまったらと思うと怖い。でも、もしそんな場があつたら耐えられる自信がない。

「ふむ。視線を感じるかと思えば夢を介して私の世界を覗いていたとは。いや、既に女神に引き渡したから私ではないか」

そこまで考えた時に、唐突に後ろから声が出たので振り向くと、そこには先ほど白い二匹の蛇を出して戦っていた男性がいた。

「貴方の名前は？」

「私の名前かね？……ふむ。サン・ジェルマン、パラケルスス、メルクリウス。様々な呼

び名があるが、愛着のあるものでカール・クラフト。カールとでも呼んでくれ。そして、フロイラインお嬢さん。何故私達の事を観ていた？」

カールと自称する男は一見笑ってはいるが目が笑っていない。それこそ返答しだいによつては私を殺そうとするほどに。

だが、私はあることに気が付いたせいで、カールさんに対して恐怖心よりも好奇心が勝った。

「そんなことはどうでもいいと思うのだけど。それより教えて欲しい事があるの」

そんな私の返ってきた言葉を聞いて、一瞬笑顔を崩したが直ぐに顔を戻して聞いてくる。

「教えて欲しい？それはなにをかね？」

「どうやってあの舞台を整えたの？」

「……何？」

「だから、どうやってやつ」

「いや、話は聞いている……。何故、私がやったと？」

「だって、貴方は目的があつてあの舞台を作つたように見えた。対して金髪の男の人は戦い自体が目的に見えた。そういう笑顔をしてた。それに貴方はさつき、『女神に引き渡した』って言ってたからそう思つたの」

「……ふむ。どうやらお嬢さんフロイラインは我が友と同じ洞察力を持つている、いや、我が友と似ているようだ」

「我が友？」

「そうだ。総てを愛しているが全力を出すと壊してしまう。ならばそれを破壊をもつてして愛を示そう。そう決めた我が友の事だ」

「愛を……破壊で？」

「そうだ……。もしや、お嬢さんフロイラインも我が友と同じように悩んでいるのかね？ならばちよ  
うど良かった」

「……ちようど良いって何がちようど良いの？」

「簡単なことだ。本当にしたい事を分かっておきながら、それに蓋をする苦しみ。最早、耐えられないところまで来ているのではないのかね？」

「……でも、そんなことをしたら私の大切な人を傷つけちゃうよ！私はそんなことしたくないっ！」

「先ほど言っただろう？それもまた愛だと」

「イヤだっ！認めたくないっ！」

「……ふむ。まあ、私には本人が嫌だと言っている物を押さえつける趣味はないし、赤の他人に助言をするほどお人好しではないのだがね。はつきりと言っておこう。人間は

得てして欲に弱い。そうやって自分の渴望を理解しないと、その内精神が壊れるぞ」

「……っ!!」

「話している間に時間がきたようだな」

「えっ……?」

カールさんが私の脚を見ているので、私も見ると自分の脚が透明になりつつあった。

そして両手両足を見ると全体的に段々と透明になつていた。

「ここに來れたのは偶然だ。お前とは二度と会うことも無いだろう」

「そう……」

そして私の体が後少しで消えるというところで彼が言う。

「他人の人生を壊してきた私が言うのも何だが悔いが残らないように生きたまえ」

その言葉を最後に私は意識を失った。

くカール視点く

「……行つたか」

いずれ黄金の獣になるであろう可能性を秘めた少女がいた場所を見ながら呟く。

「前々から獣殿の因子がある一定の期間、回歸する度にもれていた事が数回あつたが、よもやこんな既知の外にある世界に流れていたとは想定外だつた」

そう。この世界は魔法少女や魔女といった、私にとつて全くの未知の存在がいた。

「今までならばこの世界の技術も利用しようとするのだが」

最早、必要ない。女神に座を渡し終え、彼女を守る為のエインフェリアもいる。これ以上は何もいらぬのだ。

「だが、それを差し引いても私は他人に対して助言をするような性格では無いのだがね」  
以前の願いが女神と似通っていたが、今は黄金の獣になりかけている少女を見ていたら不思議と助言をしなくなってしまった。

「まあ、もう会うこともないだろう。仮に会うことになろうとも、今の性格とはかけ離れているように仕向けた。これで、私がいなかった場合の獣殿はどうやって行動するかを検証も出来る。まあ、私の目的は既に達成された。彼女がどうなろうと女神に害が及ばなければどうでもいいのだがね。さて、私もそろそろ行くとしよう」

そう言つて私は元の世界に帰つたのだつた。

## 4 話

「昼休み、まどか視点」

「……………ん。ハハハは？」

目が覚めるとベッドの上にあった。ベッドはカーテンで遮られて周りの様子が分からず、ここが何処だか分からなかった。私はベッドの上に座り直してから、寝る前に何をしていたか考える。

「私は何を……………」

……………そうだ。私はたしかカールさんに会って話をしたんだ。そして

「破壊をもつてして愛を示す……………か……………」

カールさんの前だから拒否したものの、私の心は既に欲に負けそうだった。

「あーあ。もしも私がそういう舞台を作れたらなあ……………」

現実的に考えると、私は何処にでもいる中学二年生。そんな私に舞台を作る為の資金、土地、そして私の相手足りうる敵を作れる筈が無いのは明白だった。

それにそんなことをしてしまったら、知人や家族に迷惑がかかってしまう。

愛情を示す、示さない、以前の問題だった。

「……でも、私は諦める事が出来るのかなあ?」

今の私は目の前にお菓子を置かれた幼子と変わらない。もし、目の前に私を下すことが可能な相手がいたら、その相手が例え家族だとしても正直我慢する自信がない。

「本当に儘ならないなあ」

自分の手を開いたり閉じたりしながらじっと見つめていると、カーテンが開いて、さやかちゃんがいきなり抱き付いてきた。

そして、私の肩を両手で掴みながら私の顔を見る。

さやかちゃんの顔は涙目になりながら必死な顔をした。

「ちよつとさやかちゃん? いきなりどうしたの?」

そう言うときさやかちゃんは啞然とした後、すぐに怒った顔をしながら言う。

「どうしたの、じゃないでしょ! 話していたらあんなに頭を痛そうにして、その後いきなり気絶しちゃったから死んじゃうかと心配してたんだよ! それなのに……なのに……!!」

そう言いながら私の膝に泣きついたさやかちゃんに少し驚いたが、さやかちゃんのことを放つてはおけないので直ぐにさやかちゃんを撫でながら言った。

「ゴメンね、さやかちゃん」

「……悪かったと思っっているならお願いだから無理だけはしないで」



「無理なんてしてないよ？」

「まどかが、最近自然と笑わなくなった事に気付いてないと思ってるの？」

「……えっ？」

予想もしていなかった言葉のせいで、思考が止まった。

「何年友達やつてると思ってるの？ずっと一緒にいて普段と違う雰囲気が続いたら誰だっけ気付くに決まってるでしょ」

「……そっかあ」

さやかちゃんに気付かれてたんだ……。もしかして、さやかちゃんよりも一緒にいる時間が長いママとパパにも気付かれてるのかなあ？

「ねえまどか。私に相談出来ないほど、私って信用出来ない？」

「そんなことないっ！さやかちゃんは私の大切な友達だもん」

「そっか……。でも、やっぱり話せない？」

「……ゴメン」

「……そっか。なら私待ってる。まどかが自分から話してくれるのを待ってる」

「……ごめんなさい」

「ごめんなさいじゃなくて、こういうときはありがとうって言ってくれれば嬉しいな」

「……そうだね。さやかちゃん、ありがとう」

「どういたしまして」

そう言つて笑うさやかちゃんの笑顔を見て、もう少し欲に負けないうちに頑張ろうと思ふ私なのでした。

↳放課後、さやか視点↳

「本当に大丈夫ですか？」

「もう大丈夫だよ仁美ちゃん。それと昼休みはありがとう、さやかちゃん」

「どういたしまして。それと話せる時がきたら何時でも私の胸の中で話してくれたまえ！」

「うん！絶対にそうする！」

まどかのまだぎこちないが自然な笑顔を出せるようになってのを見ると、あの時保健室で私達が気付いている事を話せて良かったと思う。

ちなみに私達と言つても、今の所気付いているのは私、仁美、まどかのパパとママの四人だけ。

まあ、今回まどかにその事を言えたのは、まどかのママから話してくれないかと相談を受けたからだつた。

まどかのママに相談される前からまどかの様子がおかしい事には気付いていたが、それを話すことよって今の関係が壊れてしまうかもしれない事が怖かった。その為、まどかのママから相談を受けても話す勇気が欠片も湧かなかった。

だが、今回まどかが倒れた事は本人には悪いが話せる為の良い切っ掛けになったと思う。

これで言いたい事は全て言ったつもりだ。

後は本人から話してくれるのを待つつもり。

「あら。もうこんな時間ですの」

仁美が時計を見ながらそう言った。

「ごめんなさい。そろそろお茶の稽古があるので失礼しますわ」

「そっかあ。仁美ちゃん。また明日」

「ええ。それではまた」

そうやって仁美は行ってしまった。

ふむ。そういえば、恭介の為にCD を選ばないといけないし、一緒にまどかを誘おうかな。

「ねえまどか。今から一緒にCD 屋さんに行かない？」

「いいよ。また上条君の？」

「へへ。まあね」

そうして私達は、C D 屋さんに向かった。

## 5 話

「まどか視点」

仁美ちゃんと別れた私はさやかちゃんと一緒にデパートのCD屋さんに来ていた。

「ねえ、さやかちゃん。これはどうかな？」

「ベートーベン作曲の月光かー。流石に曲の雰囲気は暗すぎない？」

「うーん。私は良いと思うんだけどなあ……」

たまたま見つけたCDを取って、それを聴きながらさやかちゃんに聞いてみるとやりわりと否定される。

「じゃあ、さやかちゃんは何が良いと思うの？」

「うーん……。あー！これの方が良くない？」

「どれどれ。ドビュッシー作の亜麻色の髪の乙女かあ……。前に見たドラマで聞いた気がするなあ。まあ、それはともかく私はそっちも良いと思う」

その後、三十分程どれにするか悩んだが結局さやかちゃんは、亜麻色の髪の乙女を買うことになってレジに並んだ。

私も気になっていた月光、途中で見つけたシューマン作の子供の情景のトロイメラ

イ、ベートーベン作の悲愴が気になったのでその三つを買うことにする。

そして、私の方が先にお会計を済ませたので人の邪魔にならないようにさやかちゃんを待っている、いきなり声が聞こえた。

『助けて!』

「……ん?」

唐突に聞こえた声の主を探して周りを見渡していると、さやかちゃんがお会計を終えてこつちに来た。

「おつ待たせー!じゃあ行こつか、まどか!」

「ゴメン。ちよつと静かに」

「……へ?いきなりどうしたの?」

問い掛けてくるさやかちゃんを敢えて無視して声の主を探すと、又声が聞こえてきた。

『助けて!まどか!』

「……うーん」

名指しかあ……。普通に考えるとこの声についておかしな点が幾つかある。周りの人が一切気にしておらず私にしか聞こえていない可能性や、すぐ近くで何か騒いでいる様子が無いので遠くから私を呼んでいる事。

だが、その中で最も可笑しな理由は、私のような普通の女子中学生に名指しで助けを求めた事だ。

「だけど、無視する訳にもいかなあ……」

「おーい。まどかあー」

このまま声の主の所へ向かうのも良いが、目の前で私の肩を揺さぶっているさやかちゃんと一緒に行くべきか否か迷う。

さやかちゃんの様子を見た限り、私と違って声が聞こえていないらしい。ならば、巻き込むべきではないと普通ならそう思うのだろう。

だが、さやかちゃんに信用していると買った手前、そういう行動は私が何時か話してくれると信じているさやかちゃんを裏切る事になってしまうのではないだろうか。

「さやかちゃん」

「ん？どしたの？」

「さやかちゃんは私が可笑しな事を言っても信じてくれる？」

そう言うときさやかちゃんは少し驚いた後、呆れた顔をしながら言う。

「……ハア。今更それを聞く？それは愚問だよ、まどか」

「そっか。ありがとう、さやかちゃん」

「良いよ。それよりも、いきなりそんなことを聞いてくるって事は何かあったの？」

私は声の音量を抑えて言う。

「声が聞こえたの」

「声?どんな風に?」

『助けて!まどか!』っていう声」

「……ええ。怪しくない?それ?」

「だよ。だから呼んだ人の所へ行こうか悩んでるんだ」

「まどかはどうしたいの?」

「出来れば行きたいかなあ。行って私にとって害があるなら警察に連絡するなりして取り除いておきたい」

「うーん……。決めた。まどかを一人で行かせるのは忍びないから私も一緒に行く」

「駄目だよ。今からやることは危険かもしれないからさやかちゃんを巻き込みたくない」

「それを言ったらまどかが一人で行く方がよっぽど危険だよ」

「でも……」

「それでも行くって言うなら無理矢理にでも行かせない」

「……分かった。我儘言っただけだね、さやかちゃん」

「良いってことよ。そら、さっさと行こっか」



「うん……。ありがとう、さやかちゃん」

「ハイハイ」

そうして声が聞こえた方向へと私とさやかちゃんは向かうのだった。

余談だが、私を無理矢理止めると言ったさやかちゃんの顔がイケメンだった。

今度から心の中で『おっぱいのついたイケメン』と呼ぼうかな？

くほむら視点く

バンツ！バンツ！

目の前にいるキュウベエを撃ち殺した後、また新しく出てきたキュウベエを追跡しながら今の状況を考察する。

時を戻す前、つまり回帰する前でも何回も今と同じ事をやったが、ここでまどかとキュウベエが出会う事を止めるのは出来なかった。

つまり、ここでキュウベエが出てきた時、既にまどかを呼んでいる可能性が高いため、今回は二人が会わないようにするという手段はもう使えないだろう。

なので今後をどうするかを決めておく。

一つ目は魔法少女のデメリットを先にまどかにだけ伝えておく。

二つ目はまどかを常に見張っておいて契約出来ない様にする。

正直、この二つしか案が浮かばない。というのも、キュウベエと会う時点で魔法少女に関わらせないようにする方法は取れないから必然的に選択肢が大幅に減るのだ。

そのうえ例え、まどかの魔法少女化を防いだとしても一ヶ月後のワルプルギスの夜の事もある。

ワルプルギスの夜にまどかを殺されてしまったら本末転倒だ。

なので、ワルプルギスの夜との戦闘の為に魔法少女達とキュウベエを全て抹殺する事は合理的ではない。

「となるとやっぱり一つ目をやってから様子見るしか方法が無いわね……」

こうなってしまった以上、対応が後手になってしまいが仕方がない。

いかに魔法少女に対して良いイメージを持たせないようにするか、そして魔法少女に関わらせないようにするかがネックになる。

逆に言えばこの二つを上手くやればワルプルギスの夜を除いてまどかが魔法少女になる可能性は限りなく低くなる。

「とは言ったものの貴方は邪魔だから一匹でも多く死んでもらうわ」

私は右腕の盾にある砂時計を止め時を止める。

そして、キュウベエに向かって三発撃ち、時間停止を解除した。

正直、キュウベエはこちらを向いていないにも関わらず銃弾を避ける事が出来るため、不意打ちでもない限り時を止めなきや当たらない。

何時もキュウベエを殺したりしてて簡単そうに見えるが意外と難しいのだ。

解除した途端すぐ近くにまで迫っていた銃弾が避ける間もなくキュウベエに当たる。

だが、ギリギリで体を動かし被害を右耳、前足一本、尻尾に抑えていた。

「随分、器用な真似をするのね。いくらでも代えがあるくせに」

「確かに代えは数えきれない程あるさ。だけど、代えがあるからと言って無駄にするのは勿体ないだろう?」

「殊勝な心掛けね」

「それは心が無いことに対しての皮肉かい?」

ふざけた問い掛けをしてくる身動きが取れないキュウベエに銃口を合わせ引き金を引く。

「やれやれ、会話をしている最中にいきなり撃ってくるなんて常識が欠けてるとしか思えないね」

「心が無いくせに常識を語るとは笑える冗談だわ」

そう言つて今度は後ろに現れたキュウベエに照準を合わせ一発撃った。

キュウベエはそれを避けて走って逃げる。

私は舌打ちした後、面倒に思いながらも追いつけないと美樹さやかとまどかが使い魔と遭遇してキュウベエと契約せざるをえない状況になってしまった。全力で追いつけ

## 6 話

「まどか視点」

「まどかあ。ホントにこっちから聞こえたの？」

「うん。間違いなくこっちから聞こえたよ」

「でも此処って関係者以外立ち入り禁止なんだけど」

これを聞いている人は察する事が出来るだろうが、現在私達はCD屋の関係者以外立ち入り禁止の扉からこっそりと侵入していた。

「例え道が合っていたとしても、かれこれ十分は歩いているのに会えないのは可笑しいでしょ」

さやかちゃんが不満そうな顔をしながらそう呟く。

「誰かに追いかけられてるんじゃないの？」

「助けを呼んでいたからそうかもね」

このまま歩いていても変化が無さそうなので帰ろうか悩んでいると、またあの声が聞こえてきた。

『助けて！僕を助けて！』

さつきよりも声が大きいため、近くにいないのかもしれない。

「さやかちゃん、またあの声が聞こえてきたよ」

「何て言ってる？」

『助けて！僕を助けて！』って言ってるよ」

それを聞いて本格的に心配しはじめたさやかちゃんは、周りを警戒して近くに転がっていた消火器を拾った。

彼女にだけ武器を持たせて頼った結果二人とも危険な目に合うのも嫌なので、私も辺

りを見回して手頃な長さの鉄パイプを見つけるとそれを拾って周りを警戒する。

そして、さやかちゃんと歩いて向かおうとしたら、また変化があった。

バンツ！バンツ！

銃声が鳴った。それも音が大きいのでかなり近い。銃声を聞いて目の前で止まったさやかちゃんを見ると、足が震えていた。

「さやかちゃん」

「な、なに？」

「怖いなら一緒に行くの止めよう」

「……」

「私はさやかちゃんを危険な目に合わせたくない」

「……ならまどかはどうするの」

「相手に接触するのは危ないけど、せめて姿だけは見ておきたいから行くつもりだよ」

「……まどかは怖くないの？」

「怖いよ。でも放っておいて後で害が及ぶ可能性を考えるともっと怖い。でも、どうし

てそんな事を聞くの?」  
「だってまどか、凄く嬉しそう」

私は彼女の発言を聞き、顔に手を当て初めて気付いた。私自身はまだ見ぬ銃に恐怖しておらず冷や汗も掻いていなかった。

それどころか玩具を見つけて喜んだ子供の様に笑っているのだ。

意識もしていない、ましてや恐怖も歓喜もしていないのにそうしている。今、自分の体は争いが起きる可能性があることに喜びを感じているのだ。そのことが、まるで自分の体が気づかない内に作り替えられている様で、とても恐ろしかった。

怖くないと感じるのはこの行動にも既知を感じる為、未知に対する恐怖心がわからないのだろう。

だが、鍛えてもいないのに突然強くなった力、無意識に闘争を望んでいる体、何より戦える可能性があることに歓喜している心。

……何時からだ。何時からこんなことを思い始めたのか。

生まれた時から? 違う。

弟が生まれてから? これも違う。



夢を見初めたあの時から？ それも違う。

……そうだ。あの時だ。

カール・クラフトという男と会ったあの場所で彼らの戦いを見たあの時からだ。

彼等の戦いは、とても言葉には表せないぐらいに輝いて見えた。

全員がそれぞれ信念を持って、そして自分の全身全霊を持って互いに殺しあっているように見えた。

だからなのだろう。

私は羨み、嫉妬し、そして羨望したのだ。

結局のところ、全てに飽いていたのだろう。友人に。家族に。学校に。そして日常全てに。

だから無意識に、そして狂おしい程に待ち侘びていたのだろう。

全力で壊せる相手を。

壊しがいのある相手を。

そして心踊る戦場を。

そうして漸く訪れたかもしれないこのチャンスに歓喜しているのだ。

「……どか、まどかつてば!」

「っ!? ……なに、さやかちゃん?」

「いや、それはこっちの台詞だよ。いきなり上の空になったから心配したよ」

「あつ……。話してる最中にごめんね、さやかちゃん」

「いいよ。それよりやっぱり見るのはやめて帰らない? 銃を持った相手がいるかもしれないのに行くのは流石に危険すぎると思う」

「……」

さやかちゃんはこう言うが私は自分の気持ちを理解した今、さやかちゃんを無視してさつさと見に行きたい。

……だが、私を心配してくれるさやかちゃんの思いを無下にすることなんて私には出来ない。

友達を取るべきか、自分の思いを優先するべきか。

「……そうだよな。やっぱり危険すぎるから帰ろうか」

「そうそう。何も自分から危ない事に首を突っ込む必要はないよ」

……私はきつと我儘なのだろう。

欲しくて欲しくて堪らない物があつて、手を伸ばせば届くかもしれないのに今を壊したくないという願いも持っている。矛盾している二つの願いを内包しているのだ。

「戻ろう、まどか」

「……うん」

そう言つてきやかちゃんが来た道に戻ろうとした瞬間、

キャンバスに絵の具をぶちまけたがごとく世界が塗り替えられた。

## 7話

「まどか視点」

「なに、これ……」

そう呟いて愕然としているさやかちゃんをよそ目に、私の身体は歓喜に打ち震えていた。

今起こっている現象が未知と感じられないのは今更だ。しかし、銃のようなそんなちやちな玩具ではなくもつと恐ろしい何か、私を打倒しうる存在がいる可能性が、私を酔いしれさせていた。

そして、頭が整った髭のついた綿あめで足が蝶の羽の化け物が現れたのを見た私は抑えきれない高揚感に包まれた。

「……嗚呼、これはいいね。……うん、この空気はともいい」

「ま、まどか……?」

敵が向けてくる殺意が、今にも殺されるかもしれない危機が、ジャキジャキと音をたてて恐怖心を煽りながら近づいてくる敵の持つ鋏が……。

狂おしい程に愛おしい

「……………え？」

私が感極まって恍惚としていると、さやかちゃんが何かを見てとても驚いている。

こんな状況でそんなものあるのかな、と疑問に思いつつ私も彼女が驚いたものを見てみると、そこには鉄パイプが頭に貫通して突き刺さって痙攣している化け物の姿があった。

「……………あれ？」

私が気づかないうちにいったい何かと、痙攣している化け物の身体を見ると刺さっている鉄パイプに見覚えがあった。

どこかで……具体的に私が持ってた筈の鉄パイプと同じ長さをしているような……。

そんなことを思いながら握っていた鉄パイプも見ると、そこには拾っていたはずの鉄パイプは存在しなかった。

そこで私は潔く気づく。

アレは私がやったのだと。

そしてそれと同時に落胆した。

あの化け物はたかがその程度で死ぬのだと。

「……はあ。さやかちゃん」

「……え？な、なにまどか」

「その鉄パイプ貸してくれないかな」

「……うん。でもなにをするの？ さつきどこからか飛んできた鉄パイプみたいに投げつけるの？」

どうやらさやかちゃんは私が投げたのだと気づいていないらしい。

まあそれでもいい。どっちにしろ、いまからやることには変わりはないのだから。

「何って……。こうするつもりだよ」

そう言った瞬間、さやかちゃんの後ろで鋏を振りかぶっていた化け物の頭部のみが消えた。

「……………え？」

さやかちゃんは呆気にとられて何が起きたのか気づいていない。

それを横目に私は化け物を塵殺おうちざつしていった。

---

世界が元に戻っていく様を見ながら呆然としていた。

「……………こんなものかあ」

結局のところ3分も経たずに化け物は全滅した。

弱い何てものじゃない。路肩の石と変わらなかつた。偶然、鉄で防いだり避けたりする敵もいたが二回目の攻撃で呆気なく死んだ。

「やっぱりもうこないのかな」

私が全力をだす機会は。私と拮抗しうる敵は存在しないのでは。

そんな風に思考していたが、さやかちゃんの姿を見て愕然とした。目に恐怖の感情を浮かべせながら私を見ているのだ。

そして唐突に怖くなった。彼女に拒絶されないかどうか。

「……………まどか。あんたが隠していたことってこれなの？」

「そうだよ。いくつかあるなかでの隠していることの一つはこれだね」

「そっか……………」

「それでどうする？さやかちゃん」



「……どうするって?」

「こんな人間離れした強さを持つ人が友達だなんて怖くないの?」

それを聞いたさやかちゃんは顔を真っ赤にして近づいてきた。

そして私の頬を大きな音がるほど強く叩いた。

「……え?」

「まどかの馬鹿!こんなことで……たかがこんなことで友達止めるわけがないでしょ!」

さやかちゃんは怖いのか震えながら、しかししっかりとした意思をその目に宿らせて私に断言した。

そして、私を強く抱き締めた。

「さやかちゃん?」

「……まどかのバカ」

「……」

「何年あんたの親友やってきたと思ってるの？今更そんなことでやめるわけないでしょ、このバカまどかつ……！」

「……さやかちゃん」

……私はバカだ。さやか<sup>親</sup>ちゃんが私を拒絶するはずがないのに信じることができなかつた。

「……さやかちゃん」

「……何よ、バカまどか」

「ありがとう、こんな私を信じてくれて」

「……そう思うなら今度何か奢って」

「うん。本当にありがとう」

さやかちゃんが顔をうずめている肩が濡れていることから泣いているであろうことは察した。

きつと彼女は怖いながらも勇気を出して私を信じてくれたのだろう。さやかちゃんを傷つけることはない。そんなことは起こり得ないのだと。

ならば、私は彼女の信頼に答えよう。彼女に何かあれば私が守ろう。

この思いは傲慢でもあり強欲でもあり傲りでもある。

だが、そんなことは知ったことか。私は誓おう。

彼女になにかあれば私が守ると。

……まあこの話しは一旦ここまでにしておこう。それよりさつきから感じる視線の正体が気になる。

「……そこにいる人出てきてくれないかな」

「まどか……？」

向こうの柱の後ろにいる相手に話しかけても出てきてくれない。なら仕方ないかな。

私はさやかちゃんへの抱擁を止めて鉄パイプを見てる人に向けて投擲した。

そのまま柱を粉碎して当たるかなと思ったが大きな銃声がして鉄パイプが落下した。どうやら、相手が撃ち落としらしい。

「……いきなり危ないわね。化け物を一撃で倒した力を人間に振るうだなんて」

全体的に黄色の服装をした女性がコツコツと足音を鳴らしながら、此方に銃を向けてゆつくりと近づいてきた。

「一般人に銃を向ける方が危険じゃない？」

「……それもそうね」

そう言つて相手が銃を下げた。正直、素直に銃を下げるとは思わず少し驚いた。が、まだ油断はできない。銃という一般人を簡単にねじ伏せることができる力を下げたのだから、銃よりもっと強い何かを持っている可能性がある。

「それでお姉さん。一体何の目的で私達を見てたのかな？」

「単刀直入に聞いわ。あなたはさっき倒した者達の正体は知ってる？」

「質問に質問で返すのはマナー違反だと思ふけどなあ。返答はNOだよ」

そう返すと女性は驚いた顔をした。

「……あなたはあれについて知らないで戦つてたのね」

「逆に聞くけどお姉さんはあれについて知ってるの？」

「……」

「ノーコメントは答えを言ってるのと同じだよ」

そう言うのと彼女は悔しそうな顔で齒噛みする。

「まあ、とりあえずお姉さん。知ってること全て教えてくれないかな」

「……」

「私達はもう関係者なんだから出来れば教えてほしいの」

「……はあ。仕方ないわね」

そう言うとお姉さんがいきなり姿を確認出来ないほどに強烈に輝いた。そして光が収まってくると私達が見覚えのある服装になった。

「私は貴方達と同じ、見滝原中学校の三年の巴マミ」

「……私は鹿目まどかです。見滝原中学校の二年です」

「わ、わたしは美樹さやかです。同じく二年です」

「あら？貴方達、年下だったのね。しっかりしてるから年上かと思ったわ」

「それはありますがどうぞいます」

「まあ、とりあえず私の家に来てちょうだい。ここで話すのもなんだし、そこでゆっくり説明するわ」

彼女が周りを見渡しながらそう誘ってくる。確かにこんな暗い場所で話してたら近くに誰か来ても気付かない可能性があるから密室の方がいいかもしれない。

「わかりました。私が決めちゃったけどさやかちゃんもそれでいいかな？」

「うん、私もそれでいいよ」

そうして私は隠れている見覚えのある気配をあえて無視してマミさんを先頭に彼女の家へついていった。

## 第8話

「まどか視点」

現在、私とさやかちゃん、巴先輩の家にお呼ばれしていた。

「はい、どうぞ。」

「ありがとうございます」

「ありがとうございます」

私達は巴先輩にだされた紅茶を飲んで一息つく。

紅茶はあまり飲んだことないからわからなかったけど飲むと心が落ち着くなあ。

日々、既知感だらけで疲れている私にとっての心の清涼剤になるかも。

「巴先輩、先輩は紅茶って何処で買ってます？」

「あら、紅茶に興味があるの？なら、学校の帰り道にお店があるから、今度一緒に買いに行きましょうよ」

「でしたら、来週の月曜の放課後とかどうですか？」

「ええ、その時間なら大丈夫よ」

「なら私、校門前で待ってますね」

そんな話をしている隣でさやかちゃんは紅茶よりも一緒に出されたケーキの方に夢中なのか美味しそうに味わっていた。

ただ、ケーキを勢いよく食べているように見えるがその実、お皿とフォークの当たる音を出さずに上品に食べている。

「ママさんっ！このケーキめっちゃ上手いっす！」

「そう。それなら良かったわ」

さやかちゃんがそんなに夢中になるものなのかと少し驚き、私も一口食べてみると生地がとてもふわふわしていてとても美味しかった。



「さてと、先ずは私が何をしているかについて話しましょうか」

「はい、よろしくお願ひします」

「貴方達は魔法少女という言葉について聞いたことあるかしら？」

「……魔法少女というと、日曜日の朝とかに放送してるようなアレのことですか？」

「うーん、アレとはちよつと違うけどまあ似たようなものね。端的に言うとな私は魔法少女なのよ」

魔法少女とはまた、随分と可愛らしいものが出てきたなあ。

「……魔法少女？」

「そうよ」

そう言いながら巴先輩は黄色い卵のような物をテーブルの上に置いた。

「これはソウルジエム。キュウベエと契約することによって生まれる魔法少女の証ね。私達、魔法少女が魔法を使うための魔力の源でもあるわ」

「契約ですか？」

「キュウベエに何でも一つ願いを叶えてもらう代わりに魔法少女になるという契約ね」

「……どんな願いでも？」

「ええそうよ」

……何でも叶うか。その言葉を聞いて思ったのはカールさんに当てられた私の願いのことだ。

私は確かに全力を出したい。そしてキュウベエとやらと契約すればそれを叶えられる可能性がある。

でも、ここで安易に契約しても良いのだろうか。確かに願いは叶うのだろう。だがその結果、私の大事な人達を傷付けてしまうかもしれない。確かに願いは叶うのだろう。だがそ

私にはそれを結論を出すための時間がまだ足りてない。人生を変える決断になるかもしれないから、よく考えてから結論を出すことにしよう。

「ママさんっ！ 何でもつてことは金銀財宝に不老不死、誰かの怪我を治すなんてこともできたりします？」

さやかちゃんも何でも願いが叶うと聞いて少し興奮しているのかその顔には喜色が表れていた。

「ああ、もちろんだとも。どんな願いだつて叶えられるよ」

「あら、いたのねキュウベエ」

いきなり現れた気配の正体は真っ白い猫のような姿をした見覚えのない生き物だった。だが、その生き物の口から出た声は聞き覚えのある声だった。

「初めまして、美樹さやか、鹿目まどか、僕はキュウベエ。君達のような素質のある魔法少女の卵と契約してその殻を破る手助けをするものだよ」

「貴女がキュウベエなのね。それで？さっき言つてたことは本当なの？」

「ああ、どんな奇跡だつて叶えてあげられるよ」

「……その契約にデメリットはないの？」

「契約したことで魔女と戦う使命を持つことぐらいかな」

魔女？魔女つて言う物語に出てくるようなしわくちやの老婆が思い付くが、ここで

言う魔女とは多分違う意味なのだろう。

「魔女ってもしかしてまどかが倒してたあの変な毛玉達のこと？」

「あれは魔女ではなくて使い魔。魔女が生み出す手下ね。手下って聞くと弱そうに聞こえるけど、放っておくと沢山の人達を犠牲に魔女になるから放置してはいけない存在ね」

「……それって、魔女はまどかが倒してたのより遥かに強いってことですか？」

「ええ、そうね」

さやかちゃんがママ先輩からそんな風に聞くと、先ほど何でも願いが叶うと聞いた顔から一転して真っ青な表情をしている。

多分、さやかちゃんのことだから友達……。まあ、端から見れば想い人にしか見ええない、恭介君の腕を治すように願うつもりだったのだろう。

まあ、命と不治の腕の怪我なら正直釣り合ってるようには見えないから恭介君よりさやかちゃんの方が友達として大事な私からしたら、思い止まってくれた方が正直有り難い。

「そもそも巴先輩が戦っているという魔女ってどういう存在なのかな、キュウベエ？」

「魔法少女が願いから産まれるものなら、魔女は呪いから産まれるもの。そして魔法少女は希望を振り撒き、魔女は絶望を撒き散らす。ようは対極の存在だよ」

「しかも魔女は普通の人には認識出来ないから一般人からしたら対処しようがない。はつきり言ってみえない災害みたいなものなのよ。実際に理由がない事件や自殺なんかは魔女が関与してるものは少なくないわ」

「どうしてそんなにヤバイ存在がいるのに誰も気付いてないんですか？ ……警察に報告しても無駄なんですか、マミさん？」

「そうね、警察に報せたとしても未解決事件として放置されるのが関の山。下手に関わっても警察では手も足もでないでしょうね」

「そんなあ……」

「さやかちゃんは魔法少女になったら何を相手に戦うのかを聞いて、考え直しているみたいだ。」

「美樹さんと鹿目さんは悩んでいるようね。それなら、今度私が魔女と戦いに行くときに一緒に行くつもりはないかしら？ 言ってみれば魔法少女とはどう言うものかの見学

会みたいなものね」

「見学会、ですか」

この提案は予想してなかったので少し困惑している。巴先輩のことだから、一般人をつれて魔女と戦うのは危険過ぎると言うかと思っただけでかなり意外だ。

しかし、見学会か……。

「さやかちゃんは どうする？」

「うーん、我儘を言うなら行ってみたいかなあ……」

……さやかちゃん、あんなに悩んでたのに見学会は即答するのね。

「理由を聞いても？」

「正直、魔法少女になって魔女と戦うことを想像するだけでも怖い。でも、何でも願いが叶うなんて機会はこの先死ぬまでないと思うの。だったら契約については先送りして、とりあえずどんなものかだけ見ておきたいかなあってね」

なるほど、確かに今すぐ決めなければいけない訳でもない。なら、とりあえず見学してどんなものか確認するのも手か。

というか、何かをするにしても先に確認するのは当たり前か。

家を買うとき、受験先を見に行くとき、旅行先のサイトを確認するとき。

そう考えると何でも願いが叶うと言う言葉に少し踊らされて冷静に考えられなかったのかもしれない。

そう言うところは気を付けないとなあ。

「わかりました。そしたら、今度行くときに一緒にさせていただきますでもいいですか？」

「ええ、もちろんよ。そうだ、携帯の連絡先を交換しましょうよ」

そうして連絡先を交換した後、魔女退治見学会についての日取りも決めて、巴先輩の家からおいとました。

……さやかちゃんは聞こえて無かったようだが、巴先輩が連絡先交換したときに小さ

な声で

「私のアドレス帳の人数、これで三人って……少なすぎるよお……」

と言ったことに対して涙がでそうになった。

これからは都合のつくときは巴先輩の家になるべく遊びにいらこうと本気で思った。



## 第9話

「さやか視点」

マミさんの家で魔法少女について聞いてから数日後、今日は先日決めた魔女退治見学会の日。今は校門前でマミさんのことを待っているところなのだ。

「うーむ……暇だ」

「全くさやかちゃんは……。マミさんは時間かかるから待ち合わせしようって言うてるのに、それを押しきったのはさやかちゃんだよ？なら、我慢して待とうよ」

「ぐぬぬ……」

私は何も持っていない為、暇を持て余していたが、まどかは一人ブックカバーの付いた本を読んで暇を潰している。

私は気になったので聞いてみることにした。

「まどかあ、それ何読んでるの？」

「これ？これはねー……。何だっけ？」

そう言いながらブックカバーを外して中を見る。

まどかさんや、自分の読んでいた本の題名を忘れるのは将来、ボケが早めに来そうで

さやかさんは心配だよ……。

「ああ、これは『神曲』だね」

「……どうしよう、まどかがいつの間にか成長している気がする。私には難しすぎて理解できないよ」

「大丈夫、私も理解できてないから」

「理解出来てないのに読むって、それって本の内容楽しめるの?」

「うーん、まあ何もしないで時間が過ぎるのを待つのは無駄だから何となく読んでるだけだしねえ」

「そうなんだ……。何か暇潰しになりそうな本、持っていたりしない?」

「えーと……。ごめん、これくらいしかないや……」

そう言うって取り出された本は、何故か英単語の本とお菓子のレシピ本だった。

「……英単語の本はわかるけど、何故お菓子のレシピ本?」

「実は暁美さんからお菓子の作り方が分からないって聞いて貸してたの」

「へえー、そうだったんだ……。私もそれ、暇潰しに借りてもいいかな?」

「うんいいよ、はいどうぞ」

「ありがとう、まどか」

ふむふむ、なるへそ。マドレーヌとかクッキーとかってそんな感じに作るのね。難し

いと思つてたけど、これなら意外と簡単に作れそうかも。

……今度、恭介に会いに行くとき持つていこうかな。

「おまたせ、美樹さん、鹿目さん」

「お、来ましたかマミさん」

読み始めたと同じタイミングでマミさんがやって来る。彼女の左肩にはキュウベエが乗っていた。

「それじゃあ今から魔法少女体験会を始めるけど二人とも準備はいいかしら？」

「準備になつてるかは微妙だけど……。私はこれを持つてきました！」

そう言つて、私はもしもの時のことを考えて持つてきた金属バットをだした。

「まあ、そういうことが起きないようには極力するけどそう考えてくれるのは助かるわ。鹿目さんも準備はいいかしら？」

「ええ大丈夫です、巴先輩。私はこれを持つてきました」

そう言つてまどかが取り出したのはボールペン五本、傘一本、棒一本だった。

「……え、えーと。この道具は？」

「ボールペンと傘はママから防犯用のを借りて、この棒はパパから借りました」

「どうか、この棒つてかなり短いけど何なのまどか？」

「これはね……。えい！」

まどかが棒を少し弄ると伸びて、短い状態より三倍くらい大きい長さになった。

「こんな風に伸びる携帯用の警棒だよ」

「そうなんだ……。とうか、まどかパパは何でこれ持つてるの？ 確かこれって軽犯

罪法に触れた気が……」

「……」

私がそう言うともどかは今それに気が付いたのか、笑顔で固まって冷や汗を流している。

「……ク、クラスの皆には内緒だよ？」

「……」

弁明を求めているのに無言を貫く辺り、このまま押し通すつもりなのだろう。

「ま、まあとりあえずそれについては置いておくとして、これを渡しておきますね巴先輩、さやかちゃん」

まどかから何故かボールペンを一本渡された。マミさんもボールペンを渡されたはいいが、少し反応に困っている。

「お母さんから借りてきたと言ってたのに良いのかしら？」

「あ、その二本は私のお小遣いで買ったものなので大丈夫ですよ。もしものときに役立つかもしれないし、普段も使える物なので是非受け取ってください」

流れを誤魔化す為かと思ったが、最初からプレゼントとして渡すつもりだったようだ。なんとなく、ドヤ顔をしながら

「ふむ、このお返しはさやかちゃんの手作り御菓子を送ろう」

「は、ははあ」

そう言つて咄嗟にお辞儀しながら乗つてくれるまどかが大好きです。

「それじゃあ鹿目さんも準備が出来てるようだし行きましょうか」

「はい」

「分かりました巴先輩」

ということので私達は校門を後にした。

……まどかが腕の袖の下に棒を隠し持ったり、靴下のなかに見えにくいようにボールペンを入れてたのは見なかったことにした。

たくましくなりすぎでしょ、まどか……。

---

私達は今、ママさんがソウルジエムを使って歩きながら魔女を探してる後ろをついていってるところだ。

(しっかしこれ、便利ですね)

(ええ、話しにくいことや遠距離でも何も使わなくても連絡を取れるから重宝するわ)  
実は今の会話は魔法少女なら誰でも使えるという念話というものを使って、口に出さずに会話をしている。

これを知った瞬間、テストで友達に答えを教えてもらい放題かもと舞い上がった。

(あ、さやかちゃん。これを使ってテストで答えを教えたりはしないから)

(……まどかはエスパーなの？何で分かったのよ……)

(いや、何となくそんなことを考えてる気がしたから言ってみただけ)

(ぐぬぬ……)

心を読めるとか、もうまどかの前では隠し事が通用しないじゃん……。

(美樹さん、そういう邪なことを考えちゃだめよ)

(はぁーい)

マミさんにも怒られてしまった……。

まあ、仕方ないか。マミさんはこういうの使わないで、自力でやろうとするだろう。  
まどかも、これを使わなくても普通にテストで満点取れるからいらない。

必然的にこれが必要としているのは私だけだからなあ。

……これが四面楚歌というやつか。

「……おーい、さやかちゃん！」

「っ！ ど、どうしたのそんな大声を出して？」

「いや、話しかけてるのに無視するだもん」

「あー……。いやあー、ごめんね？ 少しブーツとしちやつてさ」

「さやかちゃんが上の空になるなんて珍しいね。何かあったの？」

「どうでもいいこと考えてただけだから大丈夫だよー」

「そう、それならいいんだけど。何かあるなら言つてよ？」

「はいはい」

そう言つてるまどかが背伸びしてる子供の様に見えて、つい頭を撫でてしまった。そうするとまどかが頬を膨らませて子供の様に怒りだす。

「むーっ！ さやかちゃんの背が高いからつて子供扱いは止めてよお！」

「アハハッ。ごめん、ごめん。つい手が動いちやつてさ」

「……もうやらないでね？」

まどかが上目遣いでそう言ってくる。

……ハッ！

あまりの可愛さにまた撫でようとしていたのか、右手が自然とまどかの頭へ吸い寄せられていく。

そして、その右手を左手で掴んで止めるといふよくわからないことをしていた。

あまりの可愛さに無意識に撫でさせようとしてくるとは、流石やで。

「二人とも魔法の反応があったわ。準備はいいかしら？」

そう言つてマミさんが止まった場所は魔ビルの前だった。

「ええ、何時でも大丈夫です」

「オーケーですっ！」

そう言つて私は金属バットを、まどかは防犯傘を何時でも対応出来るように持った。

だが、私達を無視して何かに気が付いたのか、魔ビルの屋上を凝視しながら魔法少女の姿に変身する。私達もマミさんの視線の先を見ると一人の女性が飛び降りていた。

このままでは地面に落ちてしまうと茫然としていたが、彼女が落ちると同時にマミさんが黄色のリボンを出し、落下中の彼女に巻き付けてゆつくりと降ろした。

「マミさん、その人は一体……」

「……(ここ)を見て」

マミさんは落ちてきた人の首を指差す。

そこには蝶々のマークが入った紋様があった。

「マミさん、これは一体？」

「これは魔法の口づけよ。これを付けられた人は、魔法の餌にされてしまうの」



「餌、ですか……?」

「大抵の被害者は自殺や事故死で片付けられてしまうから、気付かれないのよね。あなたたちの近くに怪しい行動をしてる人がいたら、このマークがあるか確認して、あったら連絡しなさい」

「了解っす!」

マミさんは落ちてきた人をその場において廃ビルの奥へ進む。

私たちもそれに続いた。

廃ビルの中に入ると入り口から少ししたところに階段があった。

普通ならなんの変哲もない階段なのだが、その上には先程見た、魔法の口づけと同じマークが空中に浮いていた。

「あれが魔法の境界の入り口よ」

「魔法の境界……?」

「ああ、いい忘れていたわね。魔法は周りの目から隠れるために自分のテリトリーを作り出すの。そのせいで普通の人では見ることすらできないって訳」

「だから、警察では役にたたないと言っていたんですね」

「そうよ。さてと、美樹さん。鹿目さん」

そう言つてマミさんは私の金属バッドとまどかの傘を掴んだ。

するとそれぞれに変化がおきて、白く可愛らしい装飾のついたバッドと傘になった。

「何かあればこれで身を守るわ」

「ありがとうございます、巴先輩」

「それじゃあ、二人とも。行きましよう」

「はい、マミさん！」

そうして、マミさんを先頭に私達は魔女の領域へと踏み込んだ。

## 10話

くさやか視点

魔女の結界の中へ入ると、そこは異空間だった。

「このごちゃ混ぜな空間が魔女の結界……」

まどかがそう呟いているが本当にごちゃ混ぜとしか言い様のない世界があつた。そこかしこに棘が生えていたり、階段や通り道はさっきの廃ビルの時と配置が変わつていたり、まるで現実と虚構が混ざりあつた世界だ。

そこでは、ある手下は薔薇の花だけを運び、またある手下は意味もなくそこら辺を走り回り、ある手下は私達をじつと観察していた。

「へえ……」

それらを睨み返していたまどかを見ると、恍惚な表情を浮かべて今か今かと待ち構えている。それはまるで、新しい玩具を見つけた童のようだった。

「いきましよう、美樹さん、鹿目さん」

「了解つす、マミさんー！」

「はい」

そういつて駆け出したママさんに続いて私、まどかの順に走り出した。

◇◇◇◇◇

走っていると綿菓子頭の手下だけではなく、新しい魔女の手下も現れる。それは、ソフトクリームに羽根が生えた姿で、頭には沢山の目玉がついていた。その手下達は、空を不規則に飛びながらも段々と私達を包围してきた。

今にも襲いかかってくるような所を、ママさんがリボンを手を持ち、それを鞭のように振るって手下達を引き裂いた。

まどかはそれを見て嬉しそうな顔をしながら、手の指の間にボールペンを複数挟み、それを手下に投げつけている。

ボールペンは手下を貫通し二、三匹ほど巻き込んでいった。

そして、討ち漏らした敵をママさんはマスケット銃で、まどかは傘で塵殺おっさつしていった。

「……まどかは楽しい？」

「うん？ ……うん、とても楽しいかな」

「そう……」

まどかは私が何を言いたいのか察したのか、獣のような笑みから好きなものを慈しむ顔へと変わった。

……まどかが楽しめることがあるというのは、確かに良い事だと思う。でも、それに没頭して大事なものを忘れてほしくなくとも思っている。

信頼していると言ったにも関わらず、こんな様だ。

これでは、あの言葉が嘘だと捉えられてもおかしくない。

そう考えていると、急に手に温もりを感じた。

見ると、まどかが私の手を握っていた。

「さやかちゃん。心配してくれてありがとう。私は大丈夫だよ」

「そ、そう？　なら、良いんだけど」

私は内心を言い当てられているようで恥ずかしくなり、心配してくれたまどかにたいして、つい顔を背けてしまう。

ちらりとまどかを見ると、そんな私を見て笑っている。

「……むう」

「ふふっ。……えい！」

そういつて拗ねてるように膨らませた私の頬を、まどかはつついてきた。私の口から息が漏れていく。

……一方向的にやられてなんか変な気分がする。

「……むうー！」

「ふみゆー！」

まどかにやり返すとまどかは変な声を出した。

「……ぷっ」

私はその顔が可笑しくて、ついつい笑ってしまった。

それを見てまどかも笑う。

「……美樹さん、鹿目さん。そういうのは、せめて帰ってからにしてもらえないかしら」

その声で振り向くとمامィさんが疲れた顔をしながら私達を見ている。

「ごめんなさい、مامィさん」

「すみません、巴先輩」

مامィさんは私達の謝罪を聞いてため息をつくとき、苦笑した。

◇◇◇◇◇

あのあと手下達を倒しながら結界の奥へと進むと、今まではビルの面影があつたが、

それが全くない通路を見つけた。

「この先に魔女の反応があるわね」

「と言うことはいよいよですか」

「そうよ、心の準備はいいかしら？」

「マミさんは改めて聞いてくる。」

「大丈夫です！」

「何時でも行けます」

そう答えると片手に持ったマスケット銃を使って、床に一本の線を引いた。するとそこから、黄色の透明なリボンが生えてきてそれが天井まで延びていく。全て延びきって、私達とマミさんで別れた状態になってしまう。

「使い魔程度なら良いけれど、魔女との戦いは流石に危険だからここから見学ね」

なるほど、確かに私達は見学に来たのであって戦いに来たのではない。隣をチラッと見ると、このまま戦えるのかと思つてワクワクした様子のもどかが一瞬無表情になったが、すぐさま笑顔で聞き分けのよい子供のように返事をした。

「……私だからわかるけどその理解と思考の早さが時々怖くなるよ。」

と、まどかが急に手に持った傘を調べ始めた。そういや、私の持つバットも敵に攻撃されそうになると自動でバリアをはる不思議道具にされてたな。まどかは傘を使って、

敵を押し潰してただけだから何の能力も付与されてないのかと思つてたけど…。何か付いているのだろうか？

「では、行つてくるわね」

「あつ、はい。頑張つてください」

「ここに見てますね！ マミさん！」

彼女が颯爽と飛び上がつて魔女のいる広い空間へと降り立つ。魔女は頭が棘の塊で胴体に羽が生えており、それでいて人間よりも遥かに巨大だった。魔女は手下達が再深部を庭園のように彩る様を体をゆらしながら楽しんでるようで、マミさんが降り立つても気付かない。

マミさんが何かに気付いたようで足下を見ると手のひらサイズの手下がうようよと作業をしており、まるで虫が蠢いているようだった。マミさんはニヤリと笑つてその内の一匹を踏み潰した。

「……………」

手下が死んだ事に気付いたのか辺りを見渡した魔女。マミさんの姿を見るやいなや、頭の棘を蠢かせ威嚇するような素振りを見せる。

マミさんは魔女に対して帽子を取り優雅にお辞儀した。それを挑発と受け取つたのか、スライムのような胴体で立ち上がり座つていた椅子を彼女へ向けて蹴り飛ばした。



マミさんは帽子を頭に戻しながら帽子からマスクット銃を取り出して、流れるような動作で椅子を撃ち落とす。

そして、弾を撃ち終えた銃を無造作に捨てて魔力で銃を大量に作り自分の周りに浮かべ、それを手にとつては撃ち、結界の中を大きく飛んで逃げる魔女を狙う。

「……!!!」

甲高い黒板を爪で引つ掻いたようなような悲鳴をあげる魔女。時々、鳶を伸ばしたり、巨大な羽で強風を起こしてマミさんを吹き飛ばそうとするが軽やかにジャンプして避けて、淡々と撃ち続ける。

マミさんが魔女を倒しに来たはずなのに、傍目から見ると銃で獣を追い立ててる狩人しか見えない。

ずっと飛び続ける魔女を見て、何時まで逃げるんだろ、と思っていたら羽に穴が空いてとうとう地に落ちた。

顔から落ちた魔女は痛そうに頭を振りながら羽を手のように使って立ち上がり目が無い筈なのにマミさんを睨んでいるのか怨めしそうな雰囲気だ。

それを見て、気付いてはいけないことに気付きそうで頭が痛くなる。何か……。魔女を見てると気付いてはいけない何か頭が浮かびそうになる。私は自然と持っているバットを握りしめていた。

「…!? ……!!」

魔女はその巨体から信じられない速度で、羽をマミさんに振るう。が、マミさんは銃をバットののように構えて振り上げた。羽はバットと少しの間、拮抗したが狙った方向から反らされ空を切る。

そして、銃を振り上げた勢いで投げ捨て、一回転しながら自分を軸に均等にマスクェット銃を作り、魔女を見据えて自分の周りで回転させて連射した。弾丸は吸い込まれるように魔女の頭部へと当たり、当たった瞬間爆発して大量の細かな破片が魔女の頭を傷付ける。

「……………」

痛みのあまり悶えて、傷付いた頭をを羽で押さえつける。マミさんは頭からリボンを取り出したかと思うと、黄色い光を帯びて巨大な大砲のような形をした銃へと変形した。

その照準を魔女へと向けて気分が乗っているのか決め台詞を言う。

「ティロ・ファイナーレっ!」

その銃からは巨大な鉄球が射出され、魔女の胴体を撃ち抜いた。そしてその傷から黄色のリボンが生えて内側から魔女を包み込んだ。このまま上手く行くかと思ったが、ここで魔女は抵抗しだす。完全に包まれかけた時に、隙間から棘を生やしてリボンと拮抗

したのだ。

「ママさんもこのまま決まると思っていたのか訝しげな表情をしながらリボンへ込める魔力を増やす。黄色のリボンが発光しだし、棘を無理矢理押し込めようとすがそれに対抗するかのよう棘の力が強くなる。」

「だが、ギチギチと大きな音を立てて拮抗しているがそれでも足りないのかママさんのリボンに包まれた。そして、圧縮されてリボンの隙間から黄色い光が漏れだし、目を開けられないほどに輝き終えると、そこには黒い卵のような物体が転がり落ちていた。」

「ふう、これにて一件落着ね」

「そう言つて冷や汗を流しながら黒い卵を拾うママさん。」

「それと同時に音もなく、魔法の境界が割れていく。割れた隙間から現実の世界が見えたかと思うと境界が全て消え、廃ビルに入った時の様子と変わらないが外の景色が高く、遠くまで見えることから階層を上に移動してるのだと解った。」

「巴先輩。それは一体……?」

「ああ、これはグリーンフシード。魔法を倒すと手に入る景品みたいなものね」

「グリーンフシード……。何か使い道でもあるのかな。」

「ママさんは変身を解除してソウルジェムを取り出す。そしてグリーンフシードに軽く当てると中から黒いモヤみたいな物がグリーンフシードへと吸い込まれていき、ソウル

ジエムの色が鈍い黄色から明るく発光した黄色へと変化した。

「はい！ これでまた魔法が使えるようになったわ」

「使えるようにして事は魔法少女になれなくなるんですか？」

まどかがそう聞くとキュウベエが回りの建物の影から出てきて、猫のような姿勢でさつと飛びマミさんの肩に飛び乗った。

「これについてはキュウベエが説明してあげて」

「分かったよ。ソウルジエムが黒く濁ってしまうと魔法少女は魔法が使えなくなるんだ。だから定期的にグリーンフシードを使って元に戻さないといけない」

「ふーん。つまりただの人間に戻っちゃうの？」

「ソウルジエムが割れて魔法少女では居られなくなるね」

「へえ、そうなんだ」

その返答に目を細めてキュウベエを見るまどか。何か今の返答におかしな所でもあったのかと思いつけど、分からない。まあ、後で聞けばいいかな。

そう思いながら魔女の結界が壊れていくのを眺めていた。